障がい者に対する意識の変容
―学生への授業後のアンケート記述から―

香川短期大学　　岡崎　昌枝（7210）

[キーワード]意識の変化、障害の理解、ボランティア参加への意欲、

１．研究の目的

日本では国際障害者年以降、障害者に対する制度や支援は少しずつではあるが、整備されてきた。障害者自立支援法の制定は、障がい当事者だけではなく多くの人々が障害者支援について考える機会を持った。しかし、学生にとっては障がい者と接する機会もまだまだ少なく制度や知識は持っていない学生がほとんどである。障がい者に対する正しい理解は、障害や制度の理解が不可欠ではないかと考える。

地域住民にとって関わりの少ない精神障がい者に対するイメージは､「変わっている」､「こわい」という否定的なイメージを持つものが多かったと谷岡ら（2007）は述べている。また、看護学生の精神障害者に対するイメージにおいても、授業前には否定的なイメージをもつ学生が多かったと仙田ら（2006）は述べている。介護・社会福祉を学ぶ学生は、高齢者の支援のみならず、障がい児・者に対する支援を将来の仕事として選択する可能性がある。障がい者は、確かに身体・知的・精神の３障害を指し、精神障がい者に特定されたものではないが、障がい者に対するイメージは肯定的ではないといえるのではないだろうか。しかし、学生にとって障害者介護は大きな就労の場ではあると同時に、地域社会で生活する障がい者への支えとなるべき人的資源でもある。

福祉を志す学生に障がい者に対して正しい知識と理解を目指した授業を行い、それがイメージの変容となることを期待し本研究を行った。

２．研究の視点及び方法

本短大は、介護福祉士・社会福祉士養成機関である。平成 21 年度、22 年度「障害者に対する支援と障害者自立支援法」を受講した学生を調査対象とした。「障害者に対する支援と障害者自立支援法」は、1 年次の履修科目（必修）である。受講後 1 年後期（１月～2 月の 15 日間）障害者施設での実習があるため、制度の理解だけではなく障がい者に対する理解を深めることを授業の到達目標としている。授業では、「よくわかる障害者福祉」小澤温編　ミネルヴァ書房　2008　を教科書として使用し、「障害者に対する支援と障害者自立支援制度」　社会福祉士養成講座　中央法規を参考文献として使用している。15 回の授業では、制度の説明の理解、障害の理解にとどまらず、障害者の思い、家族の思い、支援者の思いなどにも触れることで、学生の障がい者に対する理解を深めるように努めた。授業後、「障害者に対する支援を学んで障がい者に対しての考え方がどのように変化したか。」について自由記述を行った。自由記述は、類型化しカテゴリーにして集計をした。学習前、学習後のことについて書かれた内容についての分析し検討を行った。

３．倫理的配慮

アンケート調査は、コードを類型化しカテゴリーにして集計を行い、それぞれについて個人が限定されないように配慮することで倫理的にも十分配慮している。

４．研究結果

回収率は 100％で、調査対象学生は、21 年度入学生 32 名、22 年度入学生 40 名、計 73 名の介護福祉専攻の学生であった。21 年度生は男性 12 名、女性 20 名、入学生のうち社会人 14 名がい

た。22 年度生は、男性 15 名、女性 25 名、入学生のうち社会人 19 名がいた。

「考え方の変化」については、合計 269 個のコードが得られた。269 個のコードのうち、学習をする前の思いや考えに触れた内容のコードは 63 個、学習後の思いや考えに触れた内容のコードは 199 個であった。

学習前のコードをカテゴリー化し、「偏見があった」、「偏見はなかった」、「障がい者との関わりが以前からあった」、「障がい者支援を知らなかった」、「間違った知識」、「関係のない存在」というコアカテゴリーが抽出された。学習後のコードをカテゴリー化したものからは、「変化ない」、「期待感」、「自己の変化」、「ノーマライゼーション」、「知識の増加」というコアカテゴリーが抽出された。

学習前のサブカテゴリーは以下のものである。「偏見があった」については、「同情」、「怖い存在」、「偏見があった」のサブカテゴリーがみられ、「偏見がなかった」については、「偏見はない」のサブカテゴリーであった。「障がい者との関わりが以前からあった」については、「親が障がい者施設に勤務」、「身内が障がい者」、「周りに自然と」のサブカテゴリーが見られ、「関係のない存在」については、「考えたこともなかった」、「関係のない存在」のサブカテゴリーであった。「障害者支援を知らなかった」については、「置かれている状況」、「制度を知らない」、「接し方を知らない」のサブカテゴリーであった。「間違った知識」については、「障がい者はみんな支援をしてもらっている」、「遺伝である」、「障がいをもつと自立できない」のサブカテゴリーであった。

学習後のサブカテゴリーは以下のものである。「変化ない」については、「社会の変わりない偏見」、「自分の思い」のサブカテゴリーであった。「期待感」については、「障害者支援への期待」、「障害者自身への期待」、「偏見をもつ人に対する期待」であった。「自己の変化」については、「学習の意欲」、「自分自身の考えの変化」、「考え方の振り返り」、「障がい者の思いに寄り添う」、「障がい者の問題に気づき」、「障がい者支援の課題に気づき」、「こころの問題」であった。「ノーマライゼーション」については、「同じ人間」、「共に暮らす」、「地域の支え」、「共生社会」、「人権・尊厳」であった。「知識の増加」については、「制度の理解」、「障がいの理解」、「学習・就労・社会進出の機会の増加」であった。

21 年度入学生と 22 年度入学生の記述の特徴として、どちらも「変化ない」と記述したものが 1 名ずつおり、2 名とも家族が障がい者施設で勤務した経験をもち、自らもその施設に頻繁に出かけた経験があるものであった。また、22 年度入学生の自由記述では、「ビデオ学習で学んだ」との記述が多く得られた。

５．考察

学習前のカテゴリーと学習後のカテゴリーの間には授業というものが存在している。障がい者との関わりについて「ある」学生と「ない」と感じる学生の感じ方の格差は大きく、「出会い」について導入し、誰もが出会いがあることへの認識から授業を始めている。自らの気づきが授業への、障がい者支援の学びへとつながっていくことになるため、ビデオ学習や自分たちの生活に身近かと感じる題材を提供していくように心がけた結果、「期待感」、「自己の変化」、「ノーマライゼーション」、「知識の増加」のコアカテゴリーが抽出できたと考える。ただ、「変化ない」と答えた学生が、少しでも気づけたといえるような授業内容の工夫が必要である。学生にとって授業での学びが障がい者感の変容に大きく影響しており、授業の重要性を再確認することとなった。